

広島大学学術情報リポジトリ

Hiroshima University Institutional Repository

Title	Faire使役構文における格付与について
Author(s)	石岡, 精三
Citation	ニダバ , 21 : 25 - 38
Issue Date	1992-03-31
DOI	
Self DOI	
URL	http://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00047227
Right	
Relation	



Faire使役構文における格付与について

石岡 精三

0. はじめに

Kayne (1975) 以来、*Faire* によるフランス語の使役構文に関する論考が数多く見られ、種々の理論が提唱されている。この構文の挙動を説明する理論の中で重要な役割を果たす操作概念として「格」の付与がある。Kayne (1975) の延長上にある Quicoli (1980, 82, 84) は、以下の (1) の格付与規則によって (2) の使役構文における格実現を説明する。

(1) Case Marking (Quicoli (1982: 206))

$V - NP - (NP) - (NP) \Rightarrow V - NP_{Acc} - (NP_{Dat}) - (NP_{Dat})$ ¹⁾

(2) a. Jean fait lire la lettre à Marie ‘Jean makes Marie read the letter’

b. Jean fait rire Marie ‘Jean makes Marie laugh’

(2) の不定法形態の V (*lire*, *rire*) は、何らかのプロセスにより基底生成された位置から matrix V (*fait*) に隣接する位置へ移動していると考えられる (この移動プロセスに関しては後述する)。この移動によって生成した動詞連続 (*faire lire*, *faire rire*) は一種の複合動詞を形成すると考えられる。この複合動詞が (1) 中の V に対応すると前提すると、(2) における NP (*la lettre*, *Marie*) の格実現が適切に説明される。この場合、 $embd.V$ (*lire*, *rire*) が付与する格、そして matrix V (*faire*) によって付与される格が直接勘案されていないのは明らかである。本稿は、*Faire* の使役構文における格付与が複合動詞のそれだけでなく、 $embd.V$ と matrix V の格付与も同時に勘案する必要性を出発点として、若干の考察を試みるものである。より具体的には、複数の格付与要素によって付与される格の連続 (これを、格付与図式と呼ぶ) が想定され、この格付与図式に対する一連の規制が設定される。

1. *Faire* 使役構文の生成

1.1 Quicoli (1980, 82, 84)

Quicoli は、当該構文の *Faire* は $S (= IP)$ を下位範疇化すると考える (3a)。(2a) に対応する D 構造 (3a) に対して V' 移動を想定する (V' は $embd.S$ に付加すると考えている) (3b) ((2b) に対しても同様)。

(3) a. Jean fait [_S Marie [_{VP} [_{V'} lire la lettre]]] (_{tv} は V' の痕跡)

b. Jean fait [_S [_{V'} lire la lettre]] [_S Marie [_{VP} _{tv}]]]

- c. Jean fait [_s Marie [_{vP} [_{v'} rire]]]
 d. Jean fait [_s [_{v'} rire [_s Marie [_{vP} tv]]]

Quicoli (1982, 1984) では標準フランス語 (Standard French, SF) と与格接語 (Clitic, Cl) の連続 (Double Datives, DD) を許容する方言 (DDF) が考察対象となっている。²⁾ ここで、(4-5) で観察される方言上での相違について考える。

(4) SF

- a. Elle le(Acc) fera téléphoner à sa mère (Quicoli 1982: 227)
 b. *Elle lui(Dat) fera téléphoner à sa mère

(5) DDF

- a. Elle le(Acc) fera téléphoner à sa mère (Quicoli 1982: 227)
 b. Elle lui(Dat) fera téléphoner à sa mère
 'She will make him phone his mother'

しかしながら、Quicoli (1982, 1984) の論法は (4) を説明するが、(5) は問題を惹起する。彼の論法では、自動詞の Dative Complement (DC) の構造位置に関して SF と DDF で異なる前提が設定される。DDF の自動詞 (例えば、*téléphoner*) は、DC に対して2種の下位範疇化素性を有すると考える。つまり、当該方言では、DC が V' の内部、あるいは外部に基底生成される可能性があると前提される。一方、SF のそれは V' の外部に基底生成される。結果として、DDF では V' 移動 (前置) が適用された構造が2通りになる。つまり、V' 移動が適用された段階における (4-5) に対応する構造は (6-7) となる。³⁾

(6) SF

- a. Elle le_i fera [_s [_{v'} téléphoner [_s t_i [_{vP} tv à sa mère]]]]
 b. *Elle lui_i fera [_s [_{v'} téléphoner [_s t_i [_{vP} tv à sa mère]]]]

(7) DDF

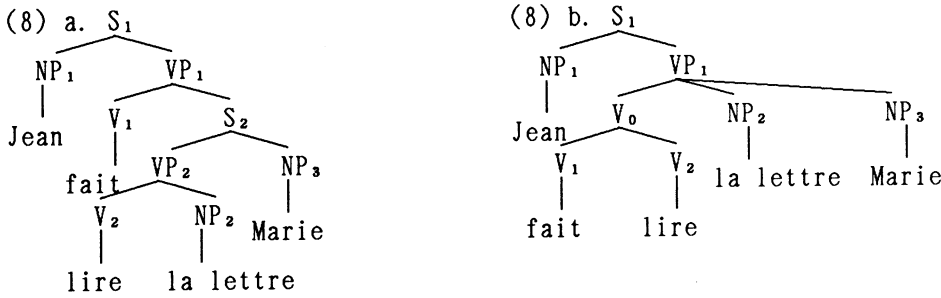
- a. Elle le_i fera [_s [_{v'} téléphoner [_s t_i [_{vP} tv à sa mère]]]]
 b. Elle lui_i fera [_s [_{v'} téléphoner à sa mère [_s t_i [_{vP} tv]]]]

(6a) おける格付与は (1) の規則で説明される。Cl (*le*) に対する格付与はそれが基底生成された位置でなされる。よって、当該 Cl には Acc が付与され、Dat が付与される可能性は排除される ((7a) の文法性も同様)。しかし、(7b) の Cl (*lui*) に Dat が付与されることはない。V' 移動によって生成した複合動詞が Acc を付与する NP が存在しないため、Dat 付与が発動しない。結果として、Quicoli の論法は (7b) を誤って非文と予測することになる。⁴⁾ つまり、Quicoli の論法は、少なくとも格付与の観点から不適切なものであることになろう。

1.2 Goodall (1985, 87)

Faire 使役構文における複合動詞の生成に関して3種の考え方がある。1つは、Kayne (1975)、Quicoli (1980, 82, 84) 等で観察されるように、当該構文の *Faire* が S を下位範疇化すると考えた上で V の投射の移動によって当該複合動詞を形成するものである。1つは、Pijnenburg & Hulk (1989) 等のように、*Faire* と不定法動詞の連続 (複合動詞) を基底で生成する立場がある。⁵⁾ 最後に、Goodall (1985, 87) のように、上の2説を融

合させた考え方がある。*Faire* 使役構文が同時に2つの句構造を有すると想定される（これを Parallel Structure と呼ぶ）。本稿の(2a)に対しては以下の構造が想定される。



複合動詞 (*fait lire*) に対して (9a) の Case Array が想定される（更に、格付与に関して (9b-e) が前提される）。これらの前提により、(8a-b) の並行構造は (2a-b) を適

- (9) a. _____ Acc (Dat)
 b. Case assignment is optional.
 c. NP may not be doubly Case-marked.
 d. When a verb assigns Case, the entire Case array must be assigned.⁶⁾
 e. Acc is assigned only under adjacency.

切に派生させる。Case Filter の要請により、NP₂ と NP₃ には何らかの格が付与されなければならない。(8a)において、V (*lire*) がその sister である NP₂ に Acc を付与する場合を考えてみよう（この場合、(8b) の NP₃ にも同時に Acc が付与されることになる）。この場合、(9c) に抵触するため、(8b) の NP₂ と NP₃ に対して Case Array (9a) を適用することはできない。結果として、NP₃ には如何なる格も付与されず、Case Filter に違反することになる。しかしながら、(8b) の複合動詞が NP₂ と NP₃ に格を付与する場合には、適切に NP₂ (Acc)、NP₃ (Dat) が付与され、(2a) が派生する（(2b) の場合も、複合動詞が NP (*Marie*) に Acc を付与することにより適切に派生可能）。

不定法動詞が DC を伴う自動詞の場合はどうであろうか。(10a-b) について考える。こ

- (10) a. *Jean a fait écrire à sa mère (à) l'enfant (Goodall (1987: (7))
 b. Jean a fait écrire l'enfant à sa mère (Goodall (1987: (8))
 'John made the child write to his mother'

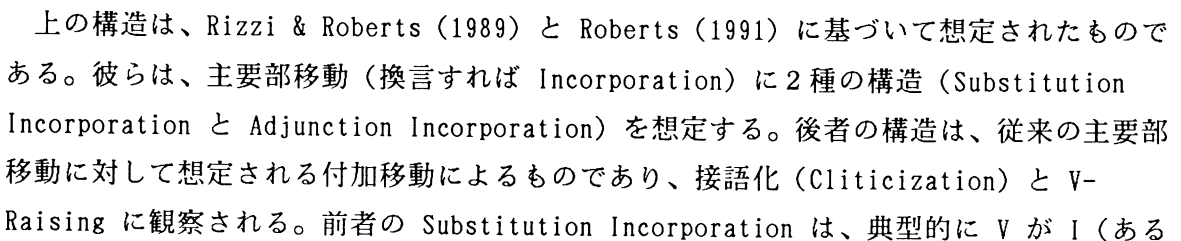
の場合もまた、複合動詞による格付与の可能性のみが問題となる。しかしながら、複合動詞 (*a fait écrire*) と NP (*l'enfant*) の間には DC (*à sa mère*) が介在する。つまり、複合動詞と NP (*l'enfant*) は (9e) の隣接条件を満足しないため、当該 NP には如何なる格も付与されない (Case Filter に違反)。結果として、(10a) は生成されないことになる。当該 NP (*l'enfant*) に格を付与するためには、複合動詞とこの NP が隣接する必要がある。この隣接要件は DC (*à sa mère*) を外置（例えば VP への付加）によって得られると考えている (Goodall (1987: 96))。’⁷⁾ これにより、NP (*l'enfant*) に ACC が付与され、(10b) が適切に派生される。

このように、Goodall の説は *Faire* 使役構文における格付与を適格に予測する。この予

"... in general the position of NP (subject NP) within S is determined by Case theory, rather than by a phrase structure rule." (() の表現は石岡による)

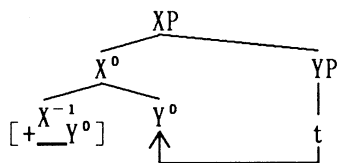
2. 提案

本稿では、フランス語の S' (=CP) に対して (11a) の構造、*Faire* 使役構文に対しては (11b) の構造を前提する ((11b) に関しては、matrix VP より下位の構造のみ表示する)。⁸⁾

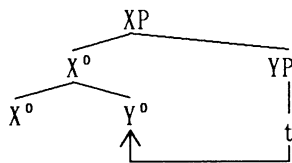


いは、T と Agr) へ移動する Affixation の場合に観察されるものである ((12) は Roberts (1991) による)。

(12) a. Substitution Incorporation



b. Adjunction Incorporation



(12a) の X^{-1} は形態論的に Y^0 を下位範疇化する。 Y^0 が置換移動する Slot は D 構造の段階で存在することになる (この Slot を Morphologically Selected Slot (MSS) と呼ぶことにする (本稿では、この Slot を□で表示する))。⁹⁾ 本稿では、使役構文における $V(fai-)$ は TP を下位範疇化し、 T^0 が置換移動する MSS を有する (当該 V^{-1} が T^0 を形態論的に下位範疇化する) と前提される。更に、(11b) においてこの T^0 が V^{-1} の sister 位置にある MSS へ移動した段階で複合動詞が形成されると考える。

2.2 NP に対する格付与

(13) a. Jean fait lire la lettre à Marie (2a)

b. *Jean fait lire Marie la lettre

c. *Jean fait lire la lettre Marie

d. *Jean fait lire à Marie la lettre

(14) a. Jean fait rire Marie (2b)

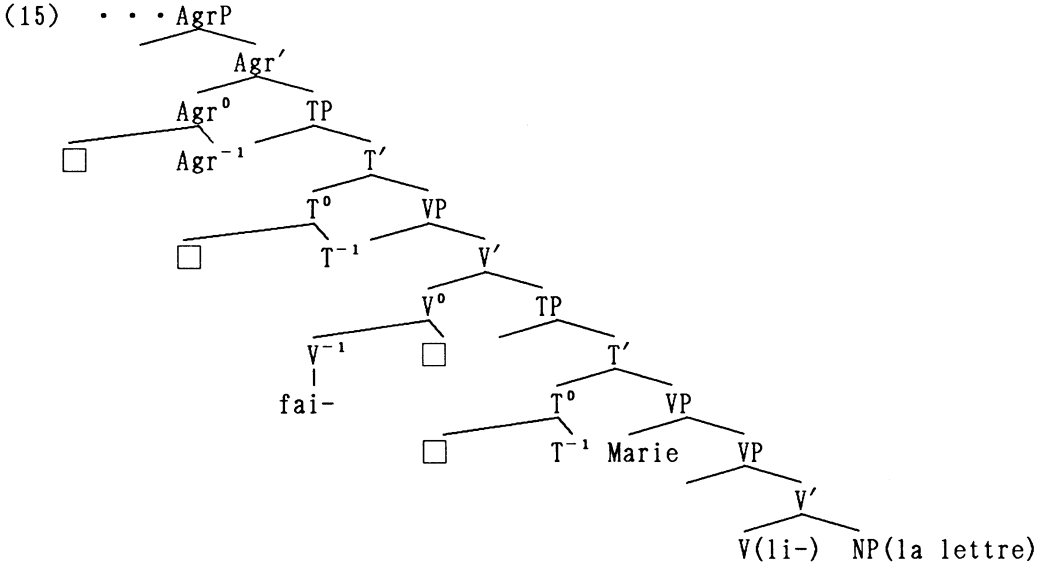
b. *Jean a fait écrire à sa mère (à) l'enfant (10a)

c. Jean a fait écrire l'enfant à sa mère (10b)

前述のように、本稿は複合動詞だけでなく、embd.V と matrix V (*faire*) もまた格を付与する可能性を持つと前提としている (*Faire* は、複合動詞と同様の Case Array (9a) を有すると前提して論を進める)。(13) の用例は概略 (15) の D 構造を持つ。embd.V

(*li-*) は上位の T^{-1} の MSS 位置へ移動して不定法 (*lire*) を形成する。更に、 T^0 全体が使役動詞 $V^{-1}(fai-)$ の MSS へ移動し複合動詞が形成される。当該動詞は、同様のプロセスで順次 T、Agr の MSS へ移動して定動詞 (*fait*) が形成される。¹⁰⁾ (13a) の NP (*la lettre*) は embd.SPEC (T) 位置へ移動している。当該 NP は、基底生成された位置で Acc を付与される (基底生成された位置にある主語 NP (*Marie*) には如何なる格も付与されない (ϕ が付与される))。複合動詞 (*fai- lire*) は当該 NP と主語 NP (*Marie*) にそれぞれ ACC、DAT を付与する (NP (*la lettre*) に Acc と ACC が同時に付与されることになるが、この付与は「格の衝突」(Case Conflict) を惹起しないと前提する)。つまり、(13a) は Case Filter を満足し、適切に文法的と予測される。しかし、この論法は誤って (13b) を文法的と予測する。(13b) では主語 NP が embd.SPEC (T) 位置へ移動している。embd.V と複合動詞は主語 NP (*Marie*) にそれぞれ ϕ 、ACC を付与する。NP (*la lettre*) にはそれぞれ Acc、 Φ (DAT) を付与する。当該 NP に対する複合動詞の DAT 付

与は、格の衝突のため排除される。つまり、(13b) 中の両 NP には格が付与され、Case Filter が満たされることになる ((14a) の文法性により、(13b) の主語 NP の SPEC (T) 位置への移動を排除することはできない)。この不都合は如何にして打開されるか。



最初に、(13b) を PF Filter (*NP (Acc, ACC) + NP (Acc)) によって排除する方法が考えられる。しかしながら、格付与に対する規制によって、この Filter の効果を実現することが可能である。使役構文の V^{-1} (*fai-*) もまた、複合動詞と同様の Case Array (9a) を有し、格を付与すると考える (V^{-1} (*fai-*)、複合動詞 (V^0) と embd.V が付与する格の連続を格付与図式と呼ぶ)。(13a) と (13b) 中の NP に対する格付与図式はそれぞれ (16) と (17) となる (embd.V を単に V と表記する)。

(16)	V	V^0	V^{-1}	V	V^0	V^{-1}	V	V^0	V^{-1}
NP (Marie)	$\phi \rightarrow \text{DAT} \rightarrow \phi$			$\phi \rightarrow \text{DAT} \rightarrow \text{Dat}$			$\phi \rightarrow \text{DAT} \rightarrow \Phi$		
NP (la lettre)	$\text{Acc} \rightarrow \text{ACC} \rightarrow \text{Acc}$			$\text{Acc} \rightarrow \text{ACC} \rightarrow \text{Acc}$			$\phi \rightarrow \text{ACC} \rightarrow \phi$. . .
(17)	V	V^0	V^{-1}	V	V^0	V^{-1}	V	V^0	V^{-1}
NP (Marie)	$\phi \rightarrow \text{ACC} \rightarrow \phi$			$\phi \rightarrow \text{ACC} \rightarrow \phi$			$\phi \rightarrow \text{ACC} \rightarrow \phi$		
NP (la lettre)	$\text{Acc} \rightarrow \Phi \rightarrow \phi$			$\text{Acc} \rightarrow \text{DAT} \rightarrow \phi$			$\phi \rightarrow \Phi \rightarrow \phi$		
NP (Marie)	$\phi \rightarrow \text{ACC} \rightarrow \phi$			$\phi \rightarrow \text{ACC} \rightarrow \text{Acc}$			$\phi \rightarrow \text{ACC} \rightarrow \text{Acc}$		
NP (la lettre)	$\phi \rightarrow \text{DAT} \rightarrow \phi$			$\text{Acc} \rightarrow \text{DAT} \rightarrow \phi$			$\text{Acc} \rightarrow \text{DAT} \rightarrow \text{Dat}$		
NP (Marie)	$\phi \rightarrow \text{ACC} \rightarrow \text{Acc}$			$\phi \rightarrow \text{ACC} \rightarrow \text{Acc}$			$\phi \rightarrow \text{ACC} \rightarrow \text{Acc}$		
NP (la lettre)	$\text{Acc} \rightarrow \Phi \rightarrow \text{Dat}$			$\text{Acc} \rightarrow \Phi \rightarrow \phi$			$\phi \rightarrow \text{DAT} \rightarrow \phi$		
NP (Marie)	$\phi \rightarrow \text{ACC} \rightarrow \text{Acc}$			$\phi \rightarrow \Phi \rightarrow \text{Acc}$			$\phi \rightarrow \Phi \rightarrow \text{Acc}$		
NP (la lettre)	$\phi \rightarrow \text{DAT} \rightarrow \text{Dat}$			$\phi \rightarrow \Phi \rightarrow \text{Dat}$			$\text{Acc} \rightarrow \Phi \rightarrow \phi$		
NP (Marie)	$\phi \rightarrow \Phi \rightarrow \text{Acc}$								
NP (la lettre)	$\text{Acc} \rightarrow \Phi \rightarrow \text{Dat}$. . .					

Case Filter によって (17) 中のすべての格付与図式を排除することは不可能である。何らかの仮説が必要となる。また、この仮説は (16) の格付与図式の内少なくとも 1 つを許容するものでなければならない。そこで、以下の仮説 A を設定することにする。仮説

仮説 A: (1) V の sister 位置に基底生成される NP は Dat (DAT) の付与を拒否する。

(2) ϕ 、あるいは Φ の連続付与 ($\phi \rightarrow \Phi$ 、 $\Phi \rightarrow \phi$) は排除される。

仮説 A は (17) 中の格付与図式すべてを排除する。一方、(16) の 格付与図式 [*Marie* ($\phi \rightarrow \text{DAT} \rightarrow \phi$)、*la lettre* ($\text{Acc} \rightarrow \text{ACC} \rightarrow \text{Acc}$)] を許容するものである。(13c-d) もまた、仮説 A と Case Filter によって排除可能である。embd.V が自動詞である (14a) の場合は、主語 NP (*Marie*) が embd.SPEC (T) 位置へ移動することにより、適切に派生される。(14b) の派生においては、DC (*sa mère*) が embd.SPEC (T) 位置へ移動することではできない(この場合、当該 NP には [$\text{Dat} \rightarrow \Phi \rightarrow \phi$ 、 $\text{Dat} \rightarrow \text{ACC} \rightarrow \text{Acc}$] etc. の格付与図式が想定され、すべて仮説 A あるいは格の衝突によって排除される)。結果として、主語 NP (*l'enfant*) は基底生成された位置にとどまることになる。Case Array (9b) により、当該 NP の格付与図式は [$\phi \rightarrow \Phi \rightarrow \phi$] となり、Case Filter に抵触する。結果として、(14b) は非文と予測されることになる。一方、(14c) は適切に文法的と予測される。主語 NP (*l'enfant*) が embd.SPEC (T) 位置へ移動すると考えられる。つまり、適切な格付与図式が少なくとも1つ存在する [*l'enfant* ($\phi \rightarrow \text{ACC} \rightarrow \text{Acc}$)、*sa mère* ($\phi \rightarrow \text{DAT} \rightarrow \phi$)]。

次に、embd.V が Ditransitive Verb の用例を検討する((18)は、Bailard (1982: (6)による)。(18b)の主語 NP (*la secrétaire*) に Acc (ACC) が付与される可能性が

- (18) a. *Elle a fait envoyer une lettre au client à la secrétaire
 b. *Elle a fait envoyer une lettre au client la secrétaire
 c. Elle a fait envoyer une lettre au client par la secrétaire
 'She had the secretary send a letter to the client'

ないため、当該文は Case Filter によって排除される。問題となるのは (18a) である。以下にその格付与図式を挙げる (Ditransitive Verb が Case Array (9b) に従う)。

(19)	V	V ⁰	V ⁻¹	V	V ⁰	V ⁻¹	V	V ⁰	V ⁻¹
NP (une lettre)	Acc	ACC	Acc	Acc	ACC	Acc	Acc	ACC	Acc
NP (le client)	Dat	Φ	Dat	ϕ	DAT	ϕ	Dat	Φ	ϕ
NP (la secrétaire)	ϕ	DAT	ϕ	ϕ	Φ	Dat	ϕ	Φ	Dat
NP (une lettre)	ϕ	ACC	Acc	ϕ	ACC	Acc	ϕ	Φ	Acc
NP (le client)	ϕ	DAT	ϕ	ϕ	Φ	Dat	ϕ	Φ	Dat
NP (la secrétaire)	ϕ	Φ	Dat	ϕ	DAT	ϕ	ϕ	Φ	ϕ . . .

明らかに、Case Filter と仮説 A によって (19) のすべての格付与図式を排除できない。(同一の動詞が、Acc (ACC) を付与し同時に複数の NP に対して Dat (DAT) を付与することはない)。仮説 A の V の sister である NP に対する格付与の規制に対応する DC に対する規制を設定することにする。結果として、仮説 A は以下のように修正される。

仮説 B: (1) ϕ 、あるいは Φ の連続付与 ($\phi \rightarrow \Phi$ 、 $\Phi \rightarrow \phi$) は排除される。

(2) V の sister 位置に基底生成される NP は Dat (DAT) の付与を拒否する。

(3) V' の sister 位置に基底生成される NP (DC) は、Dat (DAT) の二重付与、あるいは Dat と DAT の同時付与を含む格付与図式を許容しない。

仮説 B は (19) におけるすべての格付与図式を排除し、(18a) は非文と予測されることになる。それでは、(18c) の文法性はどのように説明されるか。この場合、主語 NP (*la secrétaire*) は前置詞 (*par*) に統率された位置に基底生成されると考えられる (前置詞 (*par*) が当該 NP に斜格 (Oblique Case, Obl) を付与する。また、*par* で導入される PP は *embd. TP*、あるいは *embd. VP* に左方付加された位置で生成されると考えられる)。つまり、格の衝突により、当該主語 NP に対して *V*、*V*⁰、*V*⁻¹ が格を付与する可能性は排除される (主語 NP に対する格付与が格付与図式から削除される)。結果として、(18c) の派生に対しては、少なくとも (20) のような適切な格付与図式が存在する。

- | | | | | | | | |
|--------------------------|----------|-----------------------|------------------------|--------------------------|----------|-----------------------|------------------------|
| (20) | <i>V</i> | <i>V</i> ⁰ | <i>V</i> ⁻¹ | (21) | <i>V</i> | <i>V</i> ⁰ | <i>V</i> ⁻¹ |
| NP (<i>une lettre</i>) | Acc | →ACC | →Acc | NP (<i>une lettre</i>) | φ | →ACC | →Acc |
| NP (<i>le client</i>) | φ | →DAT | →φ | NP (<i>le client</i>) | φ | →DAT | →φ |

ここで、Zubizarreta (1985) と Goodall (1987) と同様に、この使役構文 (*Faire*+ (*par*) 構文) の *embd. V* はその *sister* である *Object* に格を付与しないと前提してみよう (この場合、Burzio's Generalization により、*embd. V* はその主語に θ 役を付与しないことになる¹¹⁾。また、*embd. V* の主語位置は空となる)。この前提による (18a) に対する適切な格付与図式は少なくとも 1 つ存在する (21)。¹²⁾

2.3 C1 に対する格付与

最初に、C1 に対する格付与が NP に対するそれと同一のプロセスによって発動すると考えてみよう (本稿では、C1 が NP と同一の位置に基底生成されると前提される。また、C1 に対する格付与はそれが基底生成された位置に対して発動すると考える)。この前提の下で、以下の用例中の (23c) 以外は説明可能である。

- (22) a. *Jean lui_i a fait envoyer un paquet t_i au facteur (Roegiest 1991: 1c)
 b. Jean lui_i a fait envoyer un paquet t_i par le facteur (同上: 1d)
 'John made the maker send a packet to him/her'
- (23) a. Jean li_i a fait rire t_i 'John made him/her laugh' (Goodall 1987: 20a)
 b. Jean lui_i a fait manger le gâteau t_i (同上: 18a)
 'John made him/her eat the cake'
 c. *Jean lui_i a fait écrire l'enfant t_i (同上: 21a)
 'John made the child write to him/her'
 d. A qui_i as-tu fait téléphoner Jean t_i?
 'whom_i did you make John telephone t_i' (Pijnenburg & Hulk 1989: 82)
 e. *Pierre, a qui_i je ferai porter ce message t_i à Jean (同上: 91c)
 'Peter, to whom_i I will make John bring the message t_i'

(23c) 以外の用例は、C1 が対応する要素が NP で実現された場合と同様の論法に依って説明される。例えば、(22a-b) の相違は (18b-c) と同様に格付与図式に対する規制である仮説 B により説明可能である。(23a) は、C1 が基底生成された位置から *embd. SPEC (T)* 位置へ移動することを示す (一般に、C1 移動は空でない *X*⁰ 範疇への付加移動と前提される)。つまり、C1 の始発移動に限り、その *SPEC (T)* 位置への Substitution が許容されると考えなければならない。一方、(23b) では *embd. V* (*mang-*) の *sister*

である NP (*le gâteau*) が embed. SPEC (T) 位置へ移動する。この用例は (13a) と同様に、少なくとも 1 つの格付与図式が存在するため、適切に文法的と予測される。Wh 要素が移動する (23d-e) もまた、同様に格付与図式によって説明される。C1 同様、Wh 要素に対する格付与が NP のそれと同じプロセスによると前提する。(23d) は (14c) と同様に、適切な格付与図式が存在するため文法的と予測される。一方、(23e) は (18a) と同様、すべての格付与図式が仮説 B により排除される。つまり、(24e) は非文と予測される。

前述したように、本稿の仮説群は (23c) を誤って文法的と予測する。(14c) ((23d)) と同様に、適切な格付与図式が少なくとも 1 つ存在するためである。つまり、格の付与 (格付与図式) によって (23d) の非文性を説明できないことになる。他の規制、あるいは原理によって当該用例を排除できないであろうか。本稿では、C1 の痕跡が照応詞 (Anaphor) として振る舞う、つまり、C1 の痕跡が束縛原理 A (Binding Principle A, BP (A)) に従うと考える。換言すれば、(23c) 中の C1 の痕跡がその統率範疇 (Governing Category, GC) 内で束縛されないことにより排除されると前提する (BP (A) に抵触する)。具体的には、GC に関する以下の定義体系が採用される。また、本稿の仮説 B は仮説 C に書き換えられることになる。

(24) The Definition of SUBJECT:

The SUBJECT consists of Agr, or of a lexically realized subject NP which has moved from the base-generated (VP adjoined) position to a SPEC position.

(25) The Definition of Governing Category (GC) :

β is a governing category for α iff β is the minimal maximal projection containing α , a governor of α , and a SUBJECT accessible to α .¹³⁾

- 仮説 C: (1) ϕ 、あるいは Φ の連続付与 ($\phi \rightarrow \Phi$ 、 $\Phi \rightarrow \phi$) は排除される。
 (2) V の sister 位置に基底生成される NP (C1) は Dat (DAT) の付与を拒否する。
 (3) V' の sister 位置に基底生成される DC である NP (C1) は、Dat (DAT) の二重付与、あるいは Dat と DAT の同時付与を含む格付与図式を許容しない。

(23c) 中の主語 NP は、仮説 B との関連から embed. SPEC (T) 位置へ移動している。よって、当該 C1 の痕跡 t_i にとっての GC は embed. TP となるであろう。つまり、 t_i はその GC 内で束縛されない。結果として、(23c) は格付与図式に関する規制 (仮説 C) に抵触しないが、BP (A) に違反するため非文と予測されることになる。一方、(22a) は格付与図式に関する規制に抵触するが、BP (A) を満足する。(22b) は格付与図式と BP (A) の双方の要件を満足する。(23a-b) も同様に、C1 の痕跡が embed. VP の主語を構成するため、その GC は matrix AgrP となる ((23b) では、embed. V の AC (*le gâteau*) が embed. SPEC (T) 位置へ移動している)。当該痕跡がその GC 内で適切に束縛され、同時に格付与図式の要請も満足するため、(23a-b) は文法的と予測されることになる。¹⁴⁾

次に、embd.V が能格動詞 (Ergative Verb) の事例を検討する。

- (26) a. Dieu a fait apparaître la Vierge aux enfants ¹⁵⁾ (Goodall 1987: 23)
b. Dieu leur_i a fait apparaître la Vierge t_i (Goodall 1987: 24a)
'God made the Virgin appear unto them'

(26a) 中の NP (*la Vierge*) は embd.V が能格動詞であるため、その sister 位置に基底生成される。当該 embd.V はその sister である NP (*la Vierge*) に格を付与しない。よって、当該 NP は、仮説 C の (1) により格が付与される位置 (embd.SPEC (T)) へ移動する必要がある。この場合、適切な格付与図式が存在するため [*la Vierge* ($\phi \rightarrow \text{ACC} \rightarrow \text{Acc}$), *les enfants* ($\phi \rightarrow \text{DAT} \rightarrow \phi$)]、(26a) は適切に文法的と予測される。(26b)においても、NP (*la Vierge*) は embd.SPEC (T) 位置へ移動すると考えられる。(26a)と同様に、(26b)に関する適切な格付与図式が存在する。BP (A) は満たされるであろうか。t_i に対する GC は embd.TP でなく matrix AgrP となる。よって、t_i がその GC 内で適切に束縛され、BP (A) が満たされる。つまり、(26b) もまた適切に文法的と予測される。次に、embd.V が能格動詞と自動詞の場合で、その sister である C1 が移動する事例を検討する。

- (27) a. *Ça lui a fait partir/ arriver (Authier & Reed 1991: 8) ¹⁶⁾
'this made him leave/ arrive'
b. Ça lui a fait accélérer/ patienter (Authier & Reed 1991: 3)
'this made him accelerate/ wait'
c. Ça l'a fait récriminer de plus belle (Authier & Reed 1991: 2b)
d. Ça lui a fait récriminer de plus belle (Authier & Reed 1991: 2c)
'this made him complain even more'

それに先立ち、embd.V が自動詞の用例 (27c-d) を検討する。主語 C1 は基底生成された位置から embd.SPEC (T) 位置へ移動している。この場合、本稿の仮説群 (特に Case Array (9a)) は当該 C1 に ACC を付与する。BP (A) の要請は満たされる。よって、本稿の仮説群は (27c) を文法的、(27d) を非文と予測する。この不都合は、C1 に対する格付与に関して、ある特定の方言グループ (DDF グループ) の Case Array が (28) のように複数の要素から成り立つと考えることにより打開可能であろう。 ¹⁷⁾

- (28) ——— { a. ACC (DAT)
 b. DAT }

つまり、(27c-d) はそれぞれ、Case Array (28a-b) を適用することにより適切に派生される (格付与図式と BP (A) に関する規制に抵触しない)。次に、(27a-b) の相違について考える。(27a) の embd.V は能格動詞であり、(27b) のそれは自動詞となっている。(27c-d) と同様に、DDF (QP) (27b) の主語 C1 は ACC、あるいは DAT を付与され得る。(SF では、ACC のみ付与される)。(27a) の主語 C1 は embd.V の sister 位置に基底生成される。本稿の仮説 C (2) により、当該 C1 に対する DAT (Dat) の付与は排除される。結果として、embd.V が能格動詞の場合には、SF と DDF (QP) の双方の主語 C1 は

ACC として実現されることになる。¹⁸⁾ 同様の論法により、(4-5) の用例中で (5b) 以外が説明される。また、この論法は、*Faire + (par)* 構文である (29) の文法性を適切に予測するであろうか。SF の場合は、C1 に対する格付与図式は $[Dat \rightarrow \Phi \rightarrow \phi]$ 、 $[\phi \rightarrow \Phi \rightarrow \phi]$ となり、仮説 C (1) によって排除され、非文と予測される。同様に、DDF でも当該文は適切に文法的と予測される。少なくとも 1 つの格付与図式 $[\phi \rightarrow DAT \rightarrow \phi]$ が存在するた

(29) Jean lui a fait écrire (par l'enfant) (Goodall 1987: 22a)
 'John made the child(someone) write to him/her'

めである (BP (A) に関する規制は満たされる。(5b) に関しては後述する)。Quicoli (1984: 3) が指摘するように、(29) は SF で非文、DDF で文法的と予測されることになる。最後に、Quicoli (1984: 33) の用例を検討する。Quicoli (1984) と Postal (1983) では、(30) が SF と DDF の双方で非文と判断される。

(30) *Pierre lui_i a fait téléphoner Joanne t_i 'Pierre made Joanne phone him'

上例では主語 NP (*Joanne*) が embed. SPEC (T) 位置へ移動している。よって、当該 NP は SUBJECT として機能する。つまり、t_i に対する GC は embed. TP となる。t_i は BP (A) に抵触するため、SF と DDF の双方で非文と予測されることになる。

3. 結語

本稿では、*Faire* 使役構文における複数の動詞 (embed. V、複合動詞と *faire*) が格を付与し、その格付与図式に対する規制が設定された。また、DDF の C1 に対しては、SF の場合と異なり (28) の Case Array が提案された。更に、C1 に対しては束縛理論の規制 (BP (A)) が設定された。しかし、これらの仮説群は本稿の (5b) と (31) の用例に対して問題を惹起するようと思われる ((5b) と (31) は共に BP (A) を満足する)。

(5b) Elle lui_i fera téléphoner (t_i) à sa mère t_i (DDF)

(31) Ça le_i fait battre (t_i) Marie t_i (Tasmowski 1984: 404)
 'this makes him beat Mary'

(32)		V	V ⁰	V ⁻¹	V	V ⁰	V ⁻¹	V	V ⁰	V ⁻¹	
	NP (sa mère)	$\phi \rightarrow$	$\Phi \rightarrow$	ϕ	Dat \rightarrow	$\Phi \rightarrow$	ϕ	Dat \rightarrow	$\Phi \rightarrow$	ϕ	...
	C1 (lui)	$\phi \rightarrow$	$\Phi \rightarrow$	Dat	$\phi \rightarrow$	$\Phi \rightarrow$	ϕ	$\phi \rightarrow$	DAT \rightarrow	ϕ	

(5b) に対する格付与図式 (32) はすべて、Case Filter あるいは仮説 C の規制に違反する。よって、本稿の仮説群は DDF の (5b) を誤って非文と予測する。(31) に対する格付与図式 (33) も同様に、Case Filter あるいは仮説 C に違反する。つまり、(31) も誤って非文と予測される (この場合、DDF における C1 に対する DAT (Dat) 付与は問題にならない。また、C1 (*le*) は始発移動において embed. SPEC (T) 位置へ移動している)。

(33)		V	V ⁰	V ⁻¹	V	V ⁰	V ⁻¹	V	V ⁰	V ⁻¹
	NP (Marie)	$\phi \rightarrow$	$\Phi \rightarrow$	ϕ	Acc \rightarrow	$\Phi \rightarrow$	ϕ	$\phi \rightarrow$	$\Phi \rightarrow$	ϕ
	C1 (le)	$\phi \rightarrow$	ACC \rightarrow	ϕ	$\phi \rightarrow$	ACC \rightarrow	ϕ	$\phi \rightarrow$	ACC \rightarrow	ϕ
	NP (Marie)	Acc \rightarrow	$\Phi \rightarrow$	ϕ	...					
	C1 (le)	$\phi \rightarrow$	ACC \rightarrow	Acc						

Tasmowski (1984: 404) は、(31) のように主語 C1 が ACC (Acc) の形態で出現するのは、embd.V の目的語 (AC) (この場合は NP (*Marie*)) が顕在的に実現される場合に限り、格付与図式 (32-33) では、NP と C1 のペアに対して同一の格付与がなされている点に留意されたい。このタイプの格付与に関しては、仮説 C (1) が発動しないと前提してみよう。その場合、(5b) と (31) に対する格付与図式の中で適切な図式が少なくとも 1 つ存在することになる (中抜き表示のそれ)。

本稿は、*Faire* 使役構文の領域の一部を取り扱ったものにすぎない。C1 に対する格付与の場合には、更に C1 の移動プロセスを勘案した論考が必要になる。¹⁹⁾

註

- 1) (1) の Case Marking Rule に関する問題点に関しては、Postal (1984:149-152) を参照されたい。
- 2) Postal (1983: 374) は、Double Datives の例として (i) を挙げる。
(i) Pierre **me** lui a fait envoyer le paquet
‘Pierre had **me** send him/her the package’
SF では、(i) が非文となる点に留意されたい (複数の C1 が生起する用例の検討は、本稿ではなされない)。
- 3) 一方、Ditransitive Verb の DC は V' 内部に基底生成されると前提される (SF と DDF の双方において)。本稿では、この場合の DC を V' の sister と考える。つまり、Ditransitive Verb に対して以下の構造 (i) を想定する。
(i) [_{VP} [_{V'} [_{V'} V ...] DC]]
- 4) Quicoli の論法は以下の DDF の (i) を文法的と予測することになる。
(i) Elle lui fera téléphoner à sa mère
‘She will make him phone his mother’
Quicoli (1980, 82, 84) は拡大標準理論 (EST) からのものである。本稿が立脚する統率・束縛理論 (GB 理論、特に Chomsky (1986)) の観点からは、この V' 移動が許容されない点に留意されたい。
- 5) 具体的には、*Faire* が Small Clause を形成する VP' を下位範疇化すると考え、以下の構造を想定する (Pijnenburg & Hulk (1989) の検討は他の機会に譲る)。
(i) $\begin{array}{c} \text{VP}' \\ \swarrow \quad \searrow \\ \text{NP} \quad \text{VP} \end{array}$ (ii) $\begin{array}{c} \text{VP}' \\ \swarrow \quad \searrow \\ \text{VP} \quad \text{à NP} \end{array}$
更に、(i-ii) の V が主要部移動によって matrix V (*faire*) の位置へ付加すると考えている (この点で、厳密な意味では複合動詞が基底生成されるということにはならないであろう。本稿でも、この V の主要部移動が操作概念として用いられる)。
- 6) (9b-d) は Goodall (1985: 179, 87:94) による。(9d) により、複合動詞が Acc を付与しない場合に Dat が付与されることは不可能となる ((9a-b) と (9d-e) は本稿でも前提される)。後述するように、(9c) は (i) のように修正される。
(i) NP may be doubly Case-marked iff there arises no Case conflict.
また、NP (C1) は「格フィルター」(Case Filter) に従うものである。
- 7) この場合、外置変形によって生成した DC の痕跡が Adjacency に関与しないと前提する必要がある。後述するように、本稿の仮説群ではこの外置変形は不要となる。
- 8) Pollock (1989) と同様に、IP (=S) が分解される。しかし、Pollock (1989) と異なり、AgrP が TP よりも上位にあるとして論を進める (cf. Ouhalla (1989))。また、主語 NP が生成される位置が VP に対する右付加か左付加かは問題にしないこ

とにする。(11a)では、TPの下位にあると考えられる AspP の標示が省略されている。NP(AC)は Accusative Complement を指す。更に厳密な検討を必要とするが、使役構文の *Faire* が下位範疇化する TP 内には AspP と否定要素 (NegP) が存在しないと前提することにより、以下の文の非文性が説明可能であろう。

(i) *Je ferai ne pas lire la lettre à Jean

(ii) *Je ferai avoir lu la lettre à Jean

上の前提は、CP、あるいは AgrP に支配された節中にもみ AspP と NegP が生成されると考えることにより導き出されるであろう (詳細な論考は他の機会に譲る)。

- 9) (12a) の X^0 と X^{-1} は、ECP に関して共に主要部範疇と前提される。 Y^0 にとって X^{-1} が Minimality Barrier となるため、 Y^0 範疇上位への更なる移動が阻止される。

(X^{-1} 範疇は、上位の MSS 位置へ移動可能である点に留意されたい (11b) 中の V (*fai-*) が上位にある Agr の MSS 位置へ移動可能となる)。(12b) の場合は、より下位の X^0 が主要部範疇の分枝にすぎないため Minimality Barrier を構成しない。よって、 Y^0 範疇 (例えば $Y^0 = Cl$) の上位への更なる移動は ECP を満たし許容される。

- 10) matrix V の主語が基底生成され、それが matrix SPEC (Agr) 位置へ移動する表示は省略してある。以下では、複合動詞が付与する格を ACC, DAT と、非複合動詞が付与する格を Acc, Dat と表示する。格が付与されない場合には、 ϕ あるいは Φ が付与され则认为る。

- 11) Burzio's Generalization : A verb that assigns Case to its object assigns a θ -role to its subject.

- 12) この論法により、以下の (i) の文法性も説明可能である

(i) Jean a fait manger le gâteau (par l'enfant). (Goodall 1987:(14))

- 13) (25) は Aoun (1985) による。また、接近可能性 (Accessibility) 等については同書を参照されたい。Cl は基底生成された位置から最終着地点 (Agr に付加した位置と考えられる) への移動は一挙に進行するものでない。一般的には付加によって移動すると考えられるが、本稿では V が (置換) 移動した T への付加移動などの中間段階での Cl の挙動に関する考察は割愛する。

- 14) (23a) における Cl の痕跡 (t_i) は embd. SPEC (T) 位置にあると考える。つまり、Cl の原初痕跡 (Original Trace) を構成するのは付加移動をする最初の移動元的位置にあるそれということになる。なお、(23d-e) の Wh 痕跡 (変項) に関する束縛原理の適用に考察は他の機会に譲る。

- 15) *les enfants, leur* が V' の sister 位置に基底生成されると前提する。

- 16) Authier & Reed は Québec French (QF) を取り扱っている。embd. V (自動詞) に対する主語が NP の場合には、当該 NP は ACC (Acc) の形態で実現される。QF は DDF の方言グループに属すると思われる。

- 17) DDF の NP と SF の NP と Cl に対しては、Case Array (9a) が保持される。この Case Array は複合動詞と *Faire* に対して適用される。本稿では、DAT (Dat) の付与には隣接性 (Adjacency) が関与しないと前提される。

- 18) 仮説 C (2) は、以下の Gibson & Raposo (1986: 30b-c) の相違を説明する。

(30)b. *Je lui ferai écrire à Jean par Daniel

c. Je la ferai écrire à Jean par Daniel

'I will Daniel write it(the letter) to John'

- 19) この問題と (5b, 31) に対する仮説に関する厳密な検討は稿を改める。(31) の用例を許容する方言の特定も必要であろう。

参考文献

- Aoun, J. (1985) . *A Grammar of Anaphora*. MIT Press, Cambridge (Mass.) .
- Authier, J. -M. and L. Reed (1991) . "Ergative Predicates and Dative Cliticization in French Causatives." *Linguistic Inquiry* 22.1, 197-205.
- Bailard, J. (1982) . "The Interaction of Semantic and Syntactic Functions and French Clitic Case Marking in Causative Sentences." *Syntax and Semantics*. 15.
- Chomsky, N. (1986) . *Barriers*. MIT Press, Cambridge (Mass.) .
- Gibson, J. and E. Raposo (1986) . "Clause Union, the Stratal Uniqueness Law and the Chômeur Relation." *Natural Language and Linguistic Theory* 4., 295-331.
- Goodall, G. (1985) . "Parallel Structures in Syntax." *The Linguistic Review* 5, 173-184.
- Goodall, G. (1987) . "Case, Clitics, and Lexical NP's in Romance Causatives." Neidle, C. and Rafael A. Nuñez Cerdeño (eds.) *Studies in Romance Languages*. Foris, Dordrecht.
- Kayne, R. (1975) . *French Syntax: the Transformational Cycle*. MIT Press, Cambridge (Mass.) .
- Manzini, M. R. (1988) . "Constituent Structure and Locality." A. Cardinaletti, G. Cinque and G. Giusti (eds.) *Constituent Structure*. Foris, Dordrecht.
- Ouhalla, J. (1989) . "Clitic Movement and the ECP." *Lingua* 79, 165-215.
- Pijnenburg, H. and A. Hulk (1989) . "Datives in French Causatives." *Probus* 1.3, 259-282.
- Pollock, J. -Y. (1989) . "Verb Movement, Universal Grammar, and the Structure of IP." *Linguistic Inquiry* 20.3, 365-424.
- Postal, P. M. (1983) . "On Characterizing French Grammatical Structure." *Linguistic Analysis* 11.4, 361-417.
- Postal, P. M. (1984) . "French Indirect Object Cliticization and SSC/BT." *Linguistic Analysis* 14.2-3, 111-182.
- Quicoli, A. C. (1980) . "Clitic Movement in French Causatives." *Linguistic Analysis* 6.2, 131-185.
- Quicoli, A. C. (1982) . "Some Issues on the Theory of Clitics." *Linguistic Analysis* 10.3, 203-273.
- Quicoli, A. C. (1984) . "Remarks on French Clitic Systems." *Linguistic Analysis* 14.1, 55-96.
- Rizzi, L. (1990) . *Relativized Minimality*. MIT Press, Cambridge (Mass.) .
- Rizzi, L. and I. Roberts (1989) . "Complex Inversion in French." *Probus* 1.1, 1-30.
- Roegiest, E. (1991) . "La Redondance Fonctionnelle dans la Construction Factitive." Kremer, Dieter(ed) *Actes Du XVIII^e Congrès International de Linguistique et de Philologie Romanes. Tome II*. Niemeyer, Tübingen.
- Roberts, I. (1991) . "Excorporation and Minimality." *Linguistic Inquiry* 22.1, 209-218.
- Tasmowski, I. (1984) . "LUI FAIRE TÉLÉPHONER QUELQU'UN D'AUTRE: UNE STRATÉGIE?" *Linguisticae Investigationes* 8.2, 403-427.
- Zubizarreta, M. (1985) . "The Relation between Morphophonology and Morphosyntax: the Case of Romance Causatives." *Linguistic Inquiry* 16, 247-289.